

依他の離言について

加藤 不二夫

『成唯識論』本論の七卷には、「九難疑」という一段があるが、その四番目に「唯識思想も法空を標榜するならば、唯識性も執された実法と同じく空なのではないか」という問いが挙げられている。それに対する答えを要約すると、「識そのものは所執されたものではないから、空ではなく有である」ということであり、その理由は「正智が証するところの、離言の唯識性までもが無いことよって、法空とするのではない」ということである。ところでここで唯識性といわれる言葉は、円成実の真如を指しているように見えるが、『成唯識論述記』には、この問答に於ける唯識性の言葉が、真理の円成実性ではなく、現象としての依他起性を指すことが注意されている。そしてその依他起性が「離言」である理由として、「後得智の証する依他起性が離言である」ことが挙げられているのである。

しかし依他が離言であるならば、唯識思想自体の成立根拠までもが曖昧になってしまうように思われる。根本智が真如・円成実を証して、しかる後に後得智に把握された依他起性としての境界が、唯識思想の説かれる根拠となると考えられるからである。それ故ここに依他を離言と述べることは、後得智により開かれた唯識の教えが、浄法界等流の正法としての資格を失いかねないような感すら抱かせる。それではこの「依他の離言」をどのように理解すればいいだろうか。

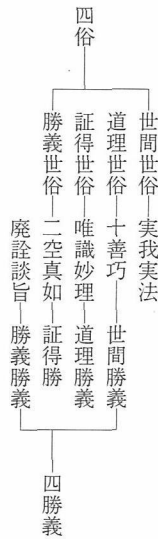
そこでこの「依他の離言」を考察するにあたり、根本智が証する離言の法性、即ち円成実の真如が、『成唯識論』でどのように示されているのかを第一の手掛かりにする。そうすると十卷の真如の理（本来自性清浄涅槃）を述べるところに、「尋思の路絶えたり」とか「名言の道断たり」と説かれることが注目される。

「尋思の路絶えたり」というのは、分別をいくら重ねても真如をつかむことは不可能であることを表している。また分別の及ばぬところであるが故に、真如は「名言の道断たり」というように、言葉によってその意味を確かめることのできぬものである。つまり円成実の真如とは名言によって、その性があることは示されるが、そのもの自体は無分別智を得た聖者のみが自覚できることであり、全く世俗諦の言説を断絶しているというのが法相宗の真如観である。

さてこのように、「断」という強い否定の語により、円成実の真如が言葉を超えていると説かれることから見ると、『成唯識論述記』で依他起性が離言といわれつつも、「言葉を断じている」とまではないわれないことが注意されてくるのではないか。そうするとそれは結局、円成実の真如が分別を絶したところであるのに対し、依他起性は分別の境界となることが関係してくると思われる。つまり真如は全く分別のおよぶところでないので、当然絶言となるが、依他起は分別されてくるところに、それ自体は離言でありつつも、衆生の上に開かれてくる可能性を有してくるのだと考えられる。

この点を明確にするために、法相宗における二諦説、即ち勝義諦と世俗諦の教説を参考にする。『成唯識論』では三能変の識を述べる帰結の部分で「三能変の差別の相は、理世俗によってい

のであって、真勝義ではない。真勝義には分別も言葉も断絶されているからである」ということが説かれている。この箇所「成唯識論述記」の注釈によれば、三能変の区別が立てられる理世俗は「第二世俗諦」であり、「分別の心」と「言説」が断絶されている真勝義は「第四勝義諦」であるという。即ち「成唯識論」の教説は、第二世俗にその分限があるというのである。これは法相宗において、四世俗と四勝義の関係が説かれるところから導かれた解釈である。四世俗・四勝義の関係は慈恩の「大乘法苑義林章」に詳しく説かれるが、これを三乗中の菩薩に約してまとめると次のようになる。



このうち世俗の世間世俗は、俗世間に名前はあるが、仏教の立場からすれば何も実体的ないものを指す。これに対し後の世俗の三つは、世俗に安立された仏説の立場である。仏説であるから勝義にも通ずるとして、初の三つの勝義と対応することになる。そして勝義諦の最も高いところが、言葉を超えた根本智の境界であり、世俗諦に安立されない勝義勝義である。

そして『大乘法苑義林章』の中には、世俗諦について第二世俗が「心所変の事」であり、第三と第四世俗が「心所変の理」であると説かれているが、これらが共に心所変のものであるといわれる所には注意を要する。つまり円成実の理も、世俗諦の上にあっ

ては後得智によって分別された円成実であり、自らの心が作つたものとして依他起性である。しかし円成実は根本智によって証されるところが本物であり、第三・第四世俗は内容として真如を含んでくるから、言葉を超えた側面を有するのである。ゆえに言葉として明らかにし得るのは、結局第二世俗諦としての依他起性であるというのが法相唯識の思想になる。それは依他起性が円成実性のように分別を断絶したところにあるのではなく、分別され得ることだからであり、依他起性自体が分別している事実そのことを顕すからであるといえる。

以上のことを考慮すれば、『成唯識論述記』で依他起が離言といわれるのは、依他起も言葉となって現れたものとしては、依他起の法体と同じとはいえないということではないか。真に依他起を得たといえるのは、無分別智を実現した聖者のみにいえることであり、分別の所得を乗り越えて本當に分別された事実こそが本當の依他起である。ただし依他起が、唯識思想として言語化され、衆生に開かれる余地があったことは、やはり真如が全く分別を断ずるところであるのに対し、依他の法体が分別吟味されることに耐え得ることであつたからである。真実が分別と言葉を断絶しているからこそ、無分別智を呼び覚まし真実に触れしめる教えが必要であり、そこに唯識思想が説かれた意味があるのではないか。唯識が浄法界等流の教法といわれるのも、衆生を救わんとする大悲が方便として働き、それが唯識の教へと示すのではないかと思ふ。実は、無漏法に他ならないということを示すのではないかと思ふ。